

事業完了(廃止等)報告書

調査研究期間等

調査研究期間	令和2年5月8日 ~ 令和3年3月8日
調査研究事項	≪委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究≫ I 教育課程に関すること II 広報・相談体制の充実にに関すること
調査研究のねらい	○ 夜間中学に通う外国籍の生徒は、年齢層が広範囲に渡り、学習歴や日本語の習熟度が異なるため、個々の生徒の学習状況に応じた効果的な指導方法、カリキュラム等について研究する。 ○ ホームページ等を利用して、夜間学級の存在を周知し、より多くの人に夜間学級を知ってもらう。 ○ 入学希望者の中には、不登校を経験した人やさまざまな事情を抱えた人がいることから、生徒一人一人の特性に合った学び方を尊重し、受入体制や指導方法等について研究する。
調査研究の成果	【広島市立二葉中学校】 【広島市立観音中学校】 別紙のとおり
報告書添付書類	・事業収支決算書（別添イ） ・委託契約書第24条に定める支出を証する書類の写し ・事業の実施に伴い作成した成果物

【広島市立二葉中学校】

調査研究事項	≪委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究≫ I 教育課程に関すること II 広報・相談体制の充実にに関すること
調査研究のねらい	○ 夜間中学に通う外国籍の生徒は、年齢層が広範囲に渡り、学習歴や日本語の習熟度が異なるため、個々の生徒の学習状況に応じた効果的な指導方法、カリキュラム等について研究する。 ○ ホームページ等を利用して、夜間学級の存在を周知し、より多くの人に夜間学級を知ってもらう。 ○ 入学希望者の中には、不登校を経験した人やさまざまな事情を抱えた人がいることから、生徒一人一人の特性に合った学び方を尊重し、受入体制や指導方法等について研究する。
調査研究の成果	1 調査研究の実施内容 【4月】 第1回研修会 各生徒の状況を把握するとともに、各学習グループにおける各教科の年間指導計画を検討し、評価方法についての共通理解を図った。 【5月】 第1回検討会議

各生徒の学習ニーズと実際の学習状況を踏まえた指導方法等について協議した。

【6月】 第2回検討会議

夜間学級の情報を発信する方法について検討し、今年度も意識して学校のホームページへの掲載を増やすことにした。

【7月】 第2回研修会

個々の生徒の学習状況や習熟度等について情報交換を行い、実態を把握するとともに、各教科の指導方法や教材について交流・検討し、指導方法や学習内容の充実・改善を図った。

【7月】 生徒の実態に適した学習指導方法等についての研修

講師を招聘し、「日本語指導について」の研修を行った。シャドーイングの基本と効果的な活用の仕方、漢字と語彙の指導方法等を通して、生徒の学習意欲が高められ、効果的な学習につながるということを学ぶことができた。

【8月】 夜間学級に関する情報についての広報

【9月・11月】 オープンスクール

2回実施した。校長会、ふれあい教室、学校のホームページ等で案内した。3組の参加があり、夜間学級を知っていただくよい機会となった。今後も地道に取り組んでいきたい。

【10月】 第3回研修会

各生徒の前期の学習状況を確認し、後期の指導内容について検討した。評価方法についても再確認した。また、高校受験希望生徒に対する取り組みについて確認した。

【12月】 異文化交流体験学習

講師によるピアノ演奏や歌唱を通して、各国の音楽を鑑賞し、異文化理解を図った。また、講師のイタリア語・ドイツ語による独唱等、国を超えて、音楽の素晴らしさを実感することができた。また、日本の歌を紹介し、生徒に日本語への興味をもたせ、その後の学習への意欲を高めることができた。

【12月】 先進校視察

大阪市立天満中学校夜間学級及び京都市立洛友中学校を視察した。

大阪市立天満中学校夜間学級は、在籍生徒数が71名、年齢層は10代から90代までと幅広く、ほとんどが外国籍で占められている。授業は、学年の枠を外して生徒の学力・日本語力によって習熟度別の5クラスで行っている。一斉授業を中心とし、特に必要があれば、教員がサポートに入る体制であった。

京都市立洛友中学校は、京都市内に2校ある不登校特例校で、京都市に唯一の夜間学級をもつ学校である。在籍生徒数は、昼間が17名、夜間は25名（そのうち19名が外国籍）である。生徒の年齢層は、10代から70代までと幅広い。国語と数学は習熟度別の4クラスで行っている。13時30分から20時40までの8時間授業を行っている。（昼間の授業は1時間目から6時間目まで、夜間の授業は5時間目から8時間目まで。）週2回の合同の授業（音楽・美術・保健体育・技術家庭科）は5・6時間目に設定し、昼間部と夜間部の交流をしている。入級希望者のニーズに合わせて学べる受入体制が考えられている。

両校とも本校と同じように、生徒の実態に即したカリキュラムを編成し、工夫した指導法で学力向上に努めている。また、個別の支援体制で授業をサポートしている。今後も、多様化する生徒実態に合わせ、個々の学習状況に応じた教材のあり方や効果的な指導方法について研究を深めていきたい。

【2月】 第4回研修会

年間指導計画や評価方法、学習指導、生徒指導等について、今年度の成果や課題を検討した。

【2月】 第3回検討会議

既卒者、入国者を問わず、さまざまな事情を抱えた生徒が入級した場合を想定し、学習グループの編成や年間指導計画等について検討した。

【3月】 第5回研修会

今年度の成果と課題をまとめ、来年度へ向けての準備を確認した。

2 調査研究の成果

- 今年度の在籍生徒は、中国・ネパール・フィリピンの外国籍の生徒で、生徒の日本語力や各教科の学習状況、卒業後の進路希望等により、日本語1・日本語2・日本語3・教科の4グループに編成した。毎週各グループの学習状況と生徒の状況を交流し、学習の内容・進度・指導方法について協議し、全員が意識統一しながら学習指導に取り組むことができた。
- 英語については同じグループ内でも学習歴や習得状況に個人差はあるものの、スモールステップで、学習した日本語と関連付けながら英語の語彙力を高める指導に力をいれた。来年度は、生徒それぞれの学力に応じた学習ができるようなグループ編成、教材の工夫も考慮しながら考えていきたい。

	<ul style="list-style-type: none"> ○ パソコンの授業では、生徒それぞれの日本語力に応じた教材を使ってシャドーイングに取り組んでいる。個人差はあるものの、繰り返して学習することで、聴く力もついてきて、大きな声が出るようになってきた。 ○ 社会の授業では、個々の生徒の学習状況に応じた教材を準備し、絵や図、ICT等も活用し、わかりやすい学習内容で、スモールステップで指導を行った。教材提示装置やパワーポイント等、ICTの活用は生徒の興味・関心を高め、学習に対するモチベーションが高まった。教科学習も楽しみながら効果的な学習をすすめることができた。 ○ 休まず授業を受けることと家庭学習ができれば、程度の差はあるものの力をつけることができるし、モチベーションを上げることもできる。また、何か1つでも自信を持たせることができれば、他にも良い影響を与えるので、教材等の工夫をしていく必要がある。 ○ 進路保障に向けて昼の補習を計画したが、補習を希望しているものの出席しない生徒の指導に苦慮した。2年生の進学希望者にも、早めに補習を始めて、進路の見通しを持たせ、保護者と連携しながら取組を進めていく。 ○ 学校のホームページに授業や行事の様子を随時載せて、夜間学級の存在を周知させることができた。 ○ 評価については、今年度も十分な研修ができなかった。先進校視察を参考に、一つの教科の、評価規準を全員で作成して研修してみるなど、今後も検討していく。
--	--

【広島市立観音中学校】

<p>調査研究事項</p>	<p>≪委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究≫</p> <ul style="list-style-type: none"> I 教育課程に関すること II 広報・相談体制の充実にに関すること
<p>調査研究のねらい</p>	<p>(学習指導に関すること)</p> <p>本校には日本人、ネパール人、中国人、フィリピン人、ブラジル人が在籍し、年齢層は10代から40代と幅広く、学習歴も様々である。義務教育内容習得が不十分な既卒者も入級している。よって、日本語の習熟度が低い生徒に対する日本語指導及び、義務教育内容の習得が不十分な生徒に対する教科指導を並立させて実施することが課題であると考えた。</p> <p>そこで、各国籍の生徒一人一人の状況に応じた効果的な指導や教材のあり方について研究し、生徒の学力向上に資することをねらいとする。</p> <p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語の習熟度が低く、また学習速度も遅い生徒に対する効果的な

学習指導

- ・ 継続的な登校が困難なため日本語の定着度が低く、初級後半レベルの日本語学習が難しい生徒に適した学習指導
- ・ 日本語学習を主とした学習段階から、教科の内容を主とした学習段階へ移行した生徒に対する教科指導
- ・ 義務教育内容の習得が不十分な日本人生徒に対する教科指導

(その課題を持つこととなった背景等)

- ・ 国籍・年齢も母国での学習歴も来日後の生活環境等も出席状況までも異なるさまざまな生徒が、少人数グループでとはいえ、一斉授業で日本語入門から学習するため、生徒間の日本語の学習速度や習熟・定着度には大きな差がある。
- ・ 数年前から、出席状況や生徒の年齢等により、日本語初級の前半終了時点で既に学習内容定着に差が生じる状況が見られ、既習事項の定着を前提として展開される教科学習の教材の学習内容を理解するのが困難な生徒が多い。
- ・ 中国人生徒の中には、未就学やそれに近い実態のため中国語の読み書きすら困難で、翻訳解説書中国語版が学習理解の補助教材とならない生徒もいる。また、ネパール人生徒においては、ネパール語版の翻訳解説書はまだ発行されていないため、英語を日本語学習の補助媒介として使える若年生徒もいれば、英語どころか母国での学習歴自体がないような中年生徒も存在する。そのような生徒たちは、結局わずかな日本語で日本語を学ぶしかないため、日本語の定着は非常に困難である。彼らに対して、多く速く教えることよりも、日本語を確実に定着させるため、絵や実物を活用したり反復練習等を多用したりするなど工夫しているが、理解・定着が困難な場合が多い。
- ・ 日本語教材だけで行う日本語学習では、日本語力はある程度までで進歩が滞ってしまいがちである。日本の文化・社会・歴史・生活習慣等を幅広く学ぶことによって全体的な日本語力が向上を図れるのだが、生徒の多くの認識はなかなかそこまで達していない。また、日本語能力は初級レベルであり、その日本語と中学校教科書の日本語にはかなりの開きがあるため、日本語による教科学習は自分にはまだ早いと考える生徒も多い。
- ・ 本校は、従来より、日本人生徒を多く受け入れており、義務教育内容未修了者への教科指導にはそれなりの実績がある。しかし、今年度より既卒者・義務教育内容の習得が不十分な生徒を迎え、さらに「工

	<p>夫された授業」によって効率よく学習指導し、短期間で成果を上げる方法について調査・研究する必要が生じた。</p> <p>以上のような状況の中で、より効果的で生徒の学習意欲を高めるような取り組みについて取り組む必要があり、日本語指導チーフ・教科指導チーフを中心に効果的な日本語学習自主制作教材の作成及び「行事を通した日本語指導」について調査研究する。また、昨年度に引き続き、夜間学級における「不登校生徒」への対応について討議し、オープンスクール開催へ向けての調査研究・情報収集も行う。</p>
<p>調査研究の成果</p>	<p>(1) 本年度の取組について</p> <p>上記のねらいの達成を目指して、本年度は次のような取り組みを行う。</p> <p>① 教員研修</p> <p>年5回程度、校内で担当教員による本年度の授業に関する研修会を開催し、生徒個々の状況を把握するとともに、本年度の学習グループ編成や年間カリキュラム・使用教材・指導方針・方法について意見交換を行い、学習指導に対する意識統一を図る場とした。また、「夜間学級による不登校生徒への援助」に関する研修会を開催し、情報交換・オープンスクール開催等について討議を重ねた。さらに「テキスト・副教材検討委員会」・「テキスト・副教材作成委員会」を経て今年度作成した「自主作成教材」の交流・研究・討議を継続的におこなった。また今年度は特例として、新型コロナウイルス感染症の感染拡大予防対策等について、随時状況に応じた取り組みを実施するため、教員研修を断続的に行った。</p> <p>② 情報収集…先進校視察</p> <p>* <u>新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止</u></p> <p>③ 授業実践</p> <p>多様な文化体験・言語活動を通して学習意欲・学力の向上に努めた。また、日本語中級グループにおいて、研修や各自収集した情報を活用して、生徒実態に応じた学習教材を準備し、分かりやすい授業づくりを調査研究する。</p> <p><行事を通した日本語指導></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 7月 地域交流 [観音公民館] <p>* <u>新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止</u></p>

・ 12月 音楽を通した日本語指導

* コロナウイルス感染拡大予防のため中止

・ 1月 国際理解講座（韓国食文化交流）

* コロナウイルス感染拡大予防のため中止

④ 不登校生徒受け入れに向けての取り組み

夜間学級における「不登校生徒」への対応について討議し、オープンスクール開催へ向けての調査研究・情報収集をおこなった。「夜間学級で学んでみませんか?」・「オープンスクール～夜間学級見学会～お知らせ」の2種類の啓発資料を作成し、11月当初より校内や各地区公民館に掲示し呼びかけをおこない、学校ホームページにも掲載した。残念ながら直前に、コロナウイルス感染拡大予防のため中止した。

(2) 改善充実の成果について

① 教員研修・教材作成

日本人は日常特に意識することなく助詞を不自由なく使い分けを行っているが、日本語基礎クラスのレベルだと難しい。今回は直前の単語を基準に使い分ける副教材を作成した。基準とする単語の種類をリストアップしたことで、生徒が見返しやすく、この教材を見返しながら助詞の問題を解こうとする姿勢がみられた。今回の教材を取り入れたことで、単語などから推測し、どの助詞を使うか考えることができる生徒が増えた。また、復習問題では、助詞を使うときに基準となる単語に下線を入れることで、解くことができる生徒が増えた。

② 授業実践・行事を通した日本語指導

コロナウイルス感染拡大予防のため、様々な行事が中止となった反面、総合的な学習の時間や合同学習・学活等を利用して、多くの実践に取り組んだ。養護教諭を中心に対策を徹底した保健指導では、その取り組みを通じて感染拡大防止はもとより、日本語指導の側面でも大きな成果があった。

また、「自分史」の取り組みでは、自分自身を見つめなおすとともに、これから入級してくる新一年生のための自己紹介を作成することで、自身が上級生になるのだという自覚を芽生えさせることができた。

③ 不登校生徒受け入れに向けての取り組み

「学齢期不登校生徒の受け入れ」について論議し、夜間学級のでき

る支援のあり方を模索した。中止になったものの、多方面からの問い合わせ、見学希望者の申し込みが例年以上多く、広報の周知・徹底が図れた。(広島大学・NPO 法人・朝日新聞・日本語指導関係者等)

(3) 改善が見られなかった原因

① 教員研修・教材作成

授業スタイルが全クラスで統一されており、教員同士の引き継ぎがスムーズにしているため、補習のための教材も生徒には好評である。しかし、それぞれの教員が補習を行い、追加教材を作成しているため、年度ごとに各分野の習熟度の差がみられた。今後は、プリントなども共有していくべきと考える。

② 授業実践・行事を通じた日本語指導

内容的にマンネリが感じられる部分があり、再考の時期に来ているように思える行事もある。生徒の出席率をもっと上げられるよう当日のプログラムをさらに充実させ、地域の人との交流を更に図る必要がある。

本年度実施できなかったが、地域交流事業等観音公民館をはじめとする他の団体との交流をさらにすすめることができるのではないかと考えている。

③ 不登校生徒受け入れに向けての取り組み

広島大学・NPO 法人・朝日新聞・日本語指導関係者等当多くの外部からの問い合わせや取材・見学希望が多かったものの、入級希望者からの反応は薄かった。内容の充実・工夫はもとより、さらに「周囲への周知徹底の方策の改善」を図り、不登校生徒・入級希望者・日本人生徒の参加の増加を図る必要がある。